

「異文化間コミュニケーション」論における 日本独自性の観念について

木村 有伸*

本稿では、異文化間コミュニケーション¹⁾に関する研究・議論を取り上げて、そこに見られる日本独自性の観念について考察する。異文化との比較において導き出される日本の諸特性を、日本独自のものとしてとらえる観念は、「日本人論(日本文化論)」と呼ばれる言説ジャンルで広く見られてきた。本稿は、こうした観念の「再生産」に注目したものであり、特に学問的性格をもつ議論の中での「再生産」状況に焦点を当てている。

異文化間コミュニケーション論で取り上げられる諸特性を分析した結果、特に日本人の集団主義とウチ・ソト意識の強さが指摘され、それらが日本独自の特性として説明されている点、そして、この特性が原因で、日本人と外国人のコミュニケーションには、さまざまな誤解や困難が生じると説明されている点が明らかになった。

したがって、このような異文化間コミュニケーション論に対しては、「日本人論」と同様に、ステレオタイプ化された見方、比較の対象としての欧米への偏重、日本の特性を抽出する方法論の問題などの問題点が指摘される。そして、注目すべきは、日本の特性がきわめて否定的に論じられている点である。日本の特性は異文化間コミュニケーションを妨げるものとして扱われている。ここに、異文化間コミュニケーション論における、日本独自性の観念の表れ方を見いだすことができる。

キーワード：異文化間コミュニケーション、日本人論(日本文化論)、国際化

1. はじめに

本稿では、異文化間コミュニケーションに関する研究・議論におい

* 韓国外語大学 日本語学部 助教授

1) 日本では、Intercultural Communicationの訳語として、「異文化間コミュニケーション」と「異文化コミュニケーション」の二語が使われている。本稿では、引用文以外は、「異文化間コミュニケーション」を用いることにする。

て、何が日本的な特性として取り上げられているか、また、それがどのように論じられているかを取り上げ、そこに見られる日本独自性の観念について考察する。ここでいう「日本独自性の観念」とは、異文化との比較を通して、日本の社会や文化、日本人の思考や行動様式を、日本独自のものとしてとらえる傾向のことをさす。

このような日本の独自性を強調する言説ジャンルは、「日本人論(日本文化論)」という名前でよく知られている。「日本人論」については、すでに多くの論考や批判があるが²⁾、本稿ではこうした独自性を強調する言説が後発の議論にも見られることを指摘する。これは独自性の観念の「再生産」といえる状況である。

この日本独自性の観念の「再生産」については、吉野(1997)が、「日本人論」で導き出された日本的諸特性が異文化マニュアルという形で大衆化されている点を指摘している。また、馬淵(2002)も、実際に海外で生活している日本人や、異文化に関心をもつ日本人が、「日本人論」で論じられる諸特性を日本独自の特性として認識している点を明らかにしている。しかし、これらの研究で指摘される「大衆化」とは別に、学問的性格をもつ議論においても、独自性の観念が反映されている点についてはまだ十分に分析されていない。本稿では、そうした議論に焦点を当てる。

日本では、1970年代以降、外国との交流の規模が広がりを見せ、「国際化」と呼ばれる状況を生み出した。その頃から、特に学問の領域で使われるようになったのが、異文化適応、異文化間コミュニケーション、異文化間教育などの「異文化」を冠する言葉である。

本稿では、そのなかから、異文化間コミュニケーションに関する研究・議論を取り上げる。「異文化間コミュニケーション(Intercultural Communication)」とは、「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響し合う過程」³⁾のことである。この定義は、人々のコミュニケーションが、彼らの所属する社会の言語や

2) 代表的なものとして、南(1980、1994)、杉本・マオア(1982)、築島(1984)、ベフ(1987)、青木(1990)、船曳(2003)、高野(2008)などが挙げられる。

3) 石井敏(1997)「異文化コミュニケーション」『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣、p.7.

文化と密接な関係にあるという前提に基づいている。

異文化間コミュニケーション研究は、第二次大戦後のアメリカで生まれ、それ以降、積極的に研究が進められるようになった分野である。日本では、1970年代に研究が行われるようになり、「国際化」の機運のもと、積極的に論じられるようになった。異文化間コミュニケーション能力の獲得も、日本人の「国際化」の重要な条件と考えられたのである。

本稿では、そうした背景のもとで論じられる異文化間コミュニケーション論において、「日本人論」で提示された諸特性のうち、どのような特性が取り上げられ、またどのように論じられているかを、個々の事例を引きながら分析する。そして、それらが取り上げられ、論じられる過程において、日本独自性の観念がどのような形で表れているかを、議論の問題点を指摘しながら考察する。

2. 日本的特性の内容と議論の特徴

本稿では、異文化間コミュニケーション論の中で、日本的特性として提示されるものを扱うため、比較文化論的なアプローチをとる異文化間コミュニケーション論を中心に扱う。ただし、異文化間コミュニケーション研究において、すべてこのアプローチがとられているわけではないことをあらかじめことわっておきたい。

比較文化論的アプローチは、日本に異文化間コミュニケーション研究が導入されてから、初めの20年間ほど(1980年代からの約20年間)の間に、よく用いられた手法である。これは、当時の日本の言論界における「日本人論(日本文化論)」の隆盛と無関係ではない。「日本人論」では、外国や外国人、外国語との比較によって、日本的な特性を導き出すという手法がとられる。異文化間コミュニケーション研究でも、この手法が取り入れられるとともに、「日本人論」によって提示された日本人の諸特性や、それを説明するための諸概念が積極的に援用されてきた。

本節では、異文化間コミュニケーション論に援用される「日本人論」の諸概念を紹介したうえで、そこで論じられる日本の社会・文化的特性と、日本人のコミュニケーション的特性を取り上げる。そして、こ

これらの諸特性を論じる際に、「外国人の反応」を引き合いに出すことによって、日本の独自性を強調する方法を指摘する。

2.1. 日本の社会・文化的特性

異文化間コミュニケーション論の中で論じられる、日本の社会・文化的特性を特徴づける最大の概念は、「集団主義」と「ウチ・ソト」である。

集団主義は、集団の目標や利益を優先する志向のことを表し、個人の目標や利益を優先する個人主義と対置される。そして、日本の集団主義的傾向とは対照的に、欧米においては個人主義的傾向が強いと説明される。

また、ウチ・ソトの概念も、この集団主義の概念と大いに関わっている。ここでいう「ウチ」とは、自分が所属する集団を意味し、その範囲は文脈によって変わるものの、たとえば、家族・親族(身内)、会社や学校などの組織、地域内での人の集まりなどをさす。「日本人論」や異文化間コミュニケーション論で語られる最大の「ウチ」は、「日本」、そして「日本人」、あるいは「(ネイティブの)日本語話者」ということになる。

この「ウチ」は、どのような構造で、また、その中にどのような人間関係が存在するのか。異文化間コミュニケーション論では、この説明に「日本人論」が援用される。なかでも頻繁に用いられるのは、『菊と刀』の著者で文化人類学者のルース・ベネディクトが提示する「義理と人情」の概念と「恥の文化」の概念、そして、社会人類学者、中根千枝の「タテ社会」の概念、それから、精神医学者、土居健郎の「甘え」の概念である。まず、これら諸概念を簡単にまとめておきたい。

2.1.1 「義理と人情」、「恥の文化」

ベネディクト(Benedict, 1946)は、「義理」を「道徳的義務」の一つとしてとらえて、西欧でいうところの「義務」と比較しながら、それを世界でも類を見ない日本独特の概念と論じる。「義理」とは、日本人が集団内の人間関係を壊さないようにするための内的規範である。また、「人情」も、集団内の人間関係を円滑に維持するために欠かせない、心のはたらきである。

そして、「恥の文化」は、絶対的な道徳的基準が存在する欧米社会の「罪の文化」と対置され、集団内での不名誉をおそれる心情と説明される。

「義理と人情」、「恥の文化」に共通するのは、日本人がいかに集団内での円滑な立ち回りに気を配っているかという点である。また、日本人にとっては、「義理」や「人情」が発揮される領域、「恥」を感じる領域が、はっきりしているという点である(これが「ウチ」ということになる)。

2.1.2 「タテ社会」

中根(1967)は、「タテ社会」を説明するにあたって、まず「場」と「資格」の概念を提示する。「場」が、個人が所属する組織や集団を意味するのに対し、「資格」は個人が獲得する学歴や職業、地位を意味する。日本社会では、この「場」の概念が支配的で、また、人間関係はその「場」への所属年数で決まる。そうした年功による序列に基づく人間関係が支配する社会を「タテ社会」という言葉で説明している。

そして、「タテ社会」の強い序列の意識で結ばれた一つの集団に所属する個人にとっては、「ウチ」がすべての世界となり、「ソト」の人々に対しては、ほとんど関心を払わない。中根は「実際、日本人は仲間といっしょにグループでいるとき、他の人々に対して実に冷たい態度をとる。(中略)自分たちの世界以外の者に対しては、敵意に似た冷たささえもつものである」⁴⁾と述べ、日本人の対人関係の特徴を説明している。

2.1.3 「甘え」

土居(1971)のいう「甘え」の心理的原型は、母子関係における乳児の心理にある。土居によれば、日本社会では、乳児が母親を求めるような「甘え」の欲求が、会社や学校、近所の住人などの人間関係の中にも存在するという。また、そこに「義理」や「人情」が見いだされる。

彼もまた、中根と同じように「内」と「外」の概念を用いて、日本人の人間関係を説明する。それによれば、こうした「甘え」の欲求が通じる

4) 中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』講談社現代新書、p.49.

人間同士の世界が「内」、それ以外の無縁の他人の世界が「外」に当たるといふ。土居は「実際、身内にべたべた甘える者に限って、他人に対しては傍若無人・冷酷無比の態度に出ることが多いように観察される」⁵⁾と述べている。

2.1.4 異文化間コミュニケーション論におけるレトリック

以上の諸概念を用いて、異文化間コミュニケーション論では、日本の社会・文化的特性は、集団の中に日本特有の人間関係が存在し、集団の外とのつながりが極端に薄い点にあると論じられる。

つまり、日本人は日本社会の中で、日本独自の文化や人間関係を持つ一方で、外の世界とのつながりが極端に薄いと論じられる。その際、その根拠としてよく用いられるのが、「島国」という日本の地理的特徴である。これに「鎖国」という歴史的特徴が加わることもある。次の文章は、その典型的な例である。

島国であることや鎖国の経験から、諸外国との交流は多少なりとも制限され続けてきたし、諸外国からの直接的な影響にさらされることも多いほうではなかった。その結果、独特の制度や習慣が発達したが、それらの多くは、外国からみると理解しづらいものとなっているであろう。

また、これらの事実や経験は日本人の意識面にも大きな影響をおよぼしていると考えられる。日本人の外国や外国人に対する閉鎖的な意識や外国人と接することに慣れていないといった感覚は、島国であったことや鎖国をしていたことと無関係ではない⁶⁾。

また、こうした「ウチ」がもつ排他的な性質についても論じられる。次の文章はやや隠喩的な表現も使われているが、異文化間コミュニケーションの学習者向けに書かれた本の中の一節である。ここには日

5) 土居健郎(1971)『「甘え」の構造』弘文堂、pp.40-41.

6) 御堂岡潔(1992)『国際意識・イメージ・価値』『地球社会時代をどう捉えるかー人間科学の課題と可能性』ナカニシヤ出版、p.108.

本という言葉が出てこないが、それ以前の文脈から、これが日本をさすことはわかるようになっている。

そこには一つの中心しかないといえる。ウチとソトとはそのような関係を指す。ウチは馴化され、名無しとなった多数の構成員から成る高い壁に囲まれた社会で、内部の者にとってソトは存在しないに等しい。それだけに、現実には異質な客人は新鮮な驚きと当惑をもって迎えらる。ウチの言葉はすべて隠語化しているので、言葉をこちらからかけることは少ない。その来訪は視的に確認されるが、その存在は黙視される。客人が去った後は、波のたたない永却の今の神話的な生活がウチで続けられていく⁷⁾。

このように、異文化間コミュニケーション論の中では、日本の社会・文化が非常に独特で、外に向かって開かれていないものとして、論じられる。

2.2 日本人のコミュニケーション的特性

それでは、このような社会・文化的特性が影響を及ぼしている、日本人のコミュニケーション的特性はどのように論じられているだろうか。なお、このコミュニケーション的特性には、言語によって表されるものだけでなく、非言語的なもの(表情や身振り・手振りなど)も含まれている。

日本的特性として提示されるコミュニケーション的特性は、実にさまざまなものに及ぶが、それらに共通する特徴を先に挙げておくとすれば、それは、日本人のコミュニケーションに対する消極的な傾向である。

まず、異文化間コミュニケーションに関するあらゆる書物で取り上げられるのが、文化人類学者エドワード・ホール(Edward Hall)の高文脈(high context)文化と低文脈(low context)文化の概念である⁸⁾。これは、コミュニケーションにおいて、どれだけ言語情報に依

7) 古田暁(1996)「プロローグ 異文化ということについて」『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、p.10.

8) この「文脈」とは、「コミュニケーションが起こる物理的、社会的、心理的、時間的

存しているか、あるいはどれだけ文脈に依存しているかというもので、日本をはじめ、他のアジア諸国やラテン系民族が高文脈文化、欧米諸国(特に北欧)が低文脈文化だと言われている。石井(1996b)は、これを踏まえ、たうで、「高コンテクスト文化を代表する日本では言語の価値が一般的に低く、レトリックや説得法の研究は発達しない。代わりに、人間関係や対人コミュニケーションでは細かい形式や礼儀作法が重視され、その場の全体的雰囲気から情報を読み取る『察し』の能力が要求される。低コンテクスト文化の欧米では言語の価値は一般的に高く、言語の効果的な使い方、すなわちレトリックが伝統的に発達する。このような低コンテクスト文化は粗い社会構造や人間関係と共存する傾向がある」⁹⁾と説明している。

この「察し」以外にも、「遠慮」、「以心伝心」、「あいまい」、「ぼかす(婉曲的な表現を使う)」などが、日本人のコミュニケーションの特徴として論じられる。いずれも、言語を使った積極的なコミュニケーションを回避しようとする傾向を示している。

また、日本人が「タテマエ(建前)」と「ホンネ(本音)」を使い分けるということもよく言われる。岩田・水田(1998)は、「日本人は、常に相手の立場に身を置いて考えるので、本音と建前を使いわけ、内と外、表と裏の発想の間で、巧みにコミュニケーションをはかっている」¹⁰⁾と述べている。次の例のように、これを集団主義や個人主義の概念とからめて説明するものもある。

そもそも、日本語には「ホンネ」と「タテマエ」なる言葉もあるように、日本社会では、儀礼的な言葉が重視される。それは、日本人の心の底に、強い相互依存の気持ちが存在しているからにほかならない。これに対して、独立性や個人主義を重んずる社会で

な環境(その場の雰囲気や状況、言語外の意味、相手とのつながりなど)のすべて」(鍋倉1997: 28)を意味する。

9) 石井敏(1996b)「言語メッセージと非言語メッセージ」『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、p.90.

10) 岩田祐子・水田園子(1998)「異文化間コミュニケーションの教育と訓練」『異文化間コミュニケーションへの招待—異文化の理解から異文化との交流に向けて』北樹出版、p.167.

は、儀礼的な言葉など重視されない。さらに、平等性と非公式性に高い価値を置く社会では、この傾向はより強くなる。そして、そのような社会では、ホンネとタテマエの峻別も、偽善の一言でかたづけられてしまう¹¹⁾。

近年、アイデンティティという言葉をよく耳にするが、それは、この言葉の意味を的確に表す単語が日本語にはない—このため日本語に訳せない—からである。その理由は、identityの持つ概念が、日本社会には存在していないことによる。つまり、集団の中では我を抑えてタテマエを重んずる日本の社会では、個人主義(ホンネ)の徹底した社会と異なり、自我の確立という概念や思想が育たなかったのである¹²⁾。

この記述から、鍋倉が、集団主義的傾向の強い社会で、建前が用いられ、個人主義的傾向の強い社会では、建前が用いられず、本音のコミュニケーションが行われると理解していることがわかる。

また、日本人が積極的に「自己開示」をしようとしなないという点もよく指摘される。特に、見知らぬ他者に対しての自己開示に消極的であると言われる。これについては、バーンランド(Barnlund)が日米の学生に対して行った調査結果がよく引き合いに出される。この調査結果によれば、日本人は、アメリカ人に比べて、より少数の人々と、より選択的なコミュニケーションをとるということ、また、言語的にも非言語的にも、より抑制的なコミュニケーションを行い、話題についても、自己を開示しない話題を選択するということである。

これを受けて、岡部(1996)は、「このように日本人はコミュニケーションで消極的な自己防御的反応に頼り、自己の守るべき領域を大きく取りがちである。これに対して、アメリカ人はいろいろな話題について主に言語手段を通して自己の経験を相手に伝え、自己を全面に押し出していく傾向が強い。」¹³⁾と説明している。

11) 鍋倉健悦(1997)『異文化間コミュニケーション入門』丸善出版、p.83.

12) 同上、p.112.

13) 岡部朗一(1996)「個人と異文化コミュニケーション」『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、p.111.

非言語的コミュニケーションの中では、日本人の表情の乏しさ、あいまいな笑い、視線を合わせないことなどが、消極的な自己開示傾向と関連づけて説明される。

2.3 日本の特性に対する外国人の反応

このような日本的諸特性が、いかに日本独自のものであるかを論じる際に、よく用いられるのが「外国人の反応」を引き合いに出す方法である。外国人には「通じない」、「伝わらない」、「理解されない」のだと論じることによってその独自性を強調する。次の文章には、その特徴がはっきりと表れている。

社会的身分関係の意識が強く、「甘え、察し」の心理構造があり、言語によるコミュニケーションが最小限に抑えられ、言語は伝達の一手段で、唯一の手段ではないように考えられるのが、日本のコミュニケーションの特徴であるといえよう。しかし、こうした言語観は、異文化コミュニケーションの舞台では、通用しないという現状があることを忘れてはならない¹⁴⁾。

日本の特性が「異文化コミュニケーションの舞台では、通用しない」ことは、外国人による「驚き」や「不快感」などの反応という形で書き表されることもある。たとえば、鍋倉(1998)は、日本人がよく「何もありませんが」とか、「つまらないものですが」といった儀礼的な謙譲言葉を使うことについて触れ、次のように述べている。

しかし、もし、このようなことを、英米人に向かって英語でいったとしたら、彼らは、おそらく、肝をつぶしてしまうに違いない。なぜなら、彼らには、まず自己を卑下して相手をたてるといふ、発想そのものがないからである。(中略)このため、テーブルの上にはちゃんと料理があるのに、日本人が、「何もありません

14) 成毛信男(1998)「言語によるコミュニケーション」『異文化間コミュニケーションへの招待』北樹出版、p.86.

んけど…」というと、彼らは、何をいわれているのかわからない。また、「つまらないものですが…」といわれて、何かを手わたされると、彼らは、なぜ、わざわざつまらない物なんかよこすのだと、かえって不愉快に思ってしまうわけである¹⁵⁾。

このように、こうした事例には、日本人のコミュニケーション的特性に対してまったく無知で不寛容な外国人が登場し、日本人とのコミュニケーションを拒絶する。日本の諸特性に寛容であったり、理解を示したりする外国人がほとんど登場しないのが、こうした議論の特徴である。

日本的なコミュニケーションを図ることは、誤解を招くだけではなく、危険だとする議論もある。次の例は、それをよく表している。

つまり、言語至上主義の文化に住む人びととコミュニケートする際には、日本的な「察しの美学」、「腹芸」はまったく機能せず、深刻な摩擦を生む危険性を常に秘めていることを、我々は理解しなければならない¹⁶⁾。

異文化コミュニケーション論では、このように外国人に理解されないという点を強調することによって、日本的特性の独自性を際立たせている。

3. 日本的特性を論じる際の問題点

以上のように、比較文化論的アプローチをとる異文化間コミュニケーション論では、日本の社会・文化的特性と日本人のコミュニケーション的特性が提示され、その独自性が強調されているが、本節ではこのような議論が含みもつ問題点について考察する。

15) 鍋倉健悦(1998)「異文化間コミュニケーションへの招待」『異文化間コミュニケーションへの招待』北樹出版、p.28.

16) 北出亮・東山安子(1998)「非言語によるコミュニケーション」『異文化間コミュニケーションへの招待－異文化の理解から異文化との交流に向けて』北樹出版、p.128.

3.1 ステレオタイプによる偏見の助長

第一の問題点は、異文化理解のために習得したはずの情報が、自文化および異文化に対するステレオタイプを作り上げ、偏見を助長し、かえって異文化理解を困難にしてしまうことである。

異文化間コミュニケーション研究においては、ステレオタイプの考察は、重要なテーマの一つである。無論、そこで目指されているのは、異文化に対する先入観や偏見をなくし、より正しい理解を進めていくことである。

しかし、ブリブル(2000)は、異文化間コミュニケーション研究の中にも、ある社会や文化、人々に対するステレオタイプのイメージが存在することを指摘している。

日本語教育の現場に立つ徳井(2002)は、「日本人論」の問題点として、提示される諸特性が日本人に特有のものであるかのようなイメージを読者に与えてしまっている点を挙げている。

また、「日本人論」の「消費」という側面に注目した吉野(1997)は、日本文化・社会について積極的に学ぼうとする日本人の帰国子女が、日本語のクラスで学んだ「日本人論」の諸説を鵲呑みにする傾向を指摘している。倉地(2006a)は、この吉野の議論を紹介したうえで、異文化接触の初期段階にある外国人留学生や就学生も、同様の傾向に陥りやすいことを指摘している。

そして、倉地(2006b)は、日本人はコミュニケーションが苦手で、アメリカ人は得意だといった日米比較文化研究で繰り返される言説が、日本人の言語行動を制限し、対話をあきらめさせてしまう結果を招くおそれがあると述べている(これを「自己成就予言(self-fulfilling prophecy)」という)。

ブリブル(2000)が指摘するように、異文化間コミュニケーションの研究でも、こうした先入観から自由ではない。次の例は、日本人の「察し」のコミュニケーションについての記述で、アメリカ人との比較で書かれている。

誇張はアメリカ人のものの言い方で最も知られた特質である。例えばアメリカ人は、空腹だと「飢えている」と言い、喉がかわいていれば「何か飲みたくて死にそうだ」と言う。寒ければ「凍

え死にしそう」で、暑ければ「暑さでうだる」と言う。

このように相手が話を誇張し、遠慮のないメッセージを送ってきた場合、我々の察しのコミュニケーションは赤信号をともし、相手に対して不誠実な「ほら吹き」という認識をする。一方アメリカ人の側にしても、日本人が遠慮して控え目に言っても、察しのコミュニケーションは使えないのでストレートに、言葉どおりに解釈してしまう¹⁷⁾。

しかし、これを読むと、前半の対話において、アメリカ人も「察し」のコミュニケーションを使っていることに気づく。すなわち、話し手の発言から、聞き手は、話し手が「非常に空腹であること」や「非常に喉が渇いていること」などを「察し」ているわけで、けっして字義どおりに話し手が飢えてしまったり、死んでしまったりするなどと思っているわけではない。「察し」が日本特有の特性であるという先入観のために、これを書いた論者自身が、そのことに気づかないでいる。

また、次の例は、異文化間コミュニケーション論の中で「日本社会の閉鎖性」について述べている箇所である。

日本には民族的、人種的に異なった外観をもっている人は誰でも外国人であると勝手に思う傾向が強く残っている。また、島国のうえに、農耕民族として発達した日本文化においては、「ウチ」と「ソト」を厳しく区別する習慣があるため、「外国人」には住みにくい場所となっているといえよう¹⁸⁾。

この記述のしばらく後に、次のような記述がある。

日本に移り住んだのだが、日本社会の閉鎖性もあり、思ったほど居心地がよくない状態が続いている人々がかなり多い。自衛策として特定の国や地域からやってきた人々が同じ地域に集団で

17) 北出亮(1993)「日本人の対人関係とコミュニケーション」『日本人のコミュニケーション』桐原書店、p.45.

18) 久米昭元・長谷川典子(2007)『ケースで学ぶ異文化コミュニケーションー誤解・失敗・すれ違い』有斐閣、p.11.

住みつく「外国人集住」現象が各地で起きている¹⁹⁾。

この記述から、「外国人集住」現象の原因を日本社会の閉鎖性に求めていることがうかがえるが、これでは、日本以外の国々にも存在する「外国人集住」現象をうまく説明できないことになる。これも、「日本社会＝閉鎖的」という先入観のために、そして、それを日本独自のものとしてとらえる観念のために、原因を日本的特性に求める傾向が見受けられる。

3.2 比較の対象としての欧米偏重

第二の問題点は、日本の諸特性を導き出すための比較の対象が、欧米（および英語）に偏っているという点である。そして、欧米の中でも特にアメリカ社会への偏りが顕著である。したがって、そこから導き出される諸特性は、あくまで欧米との比較によって「日本的」と見なされているにすぎない。この点は、「日本人論」で指摘される問題点がそのまま当てはまる。

「日本人論」の中から例を挙げれば、土居(1971)の提示する「甘え」の概念の場合、土居がそれを日本独自の概念と述べる根拠は、「英語には『甘え』に当てはまる語彙が存在しない」という点にあった。しかし、イー・オリョン(李御寧)は、著書『「縮み」志向の日本人』(1982)の中で、韓国語にも「甘え」に相当する語彙が存在することを指摘して、あっさりとその根拠を崩してしまった。これについて、イー(1982)は、「日本人がこれまで書いてきた日本・日本人論には、『甘えの構造』のように英語にないから日本語の特異性だという、主として英米人との単純比較を通じて得られたものが、かなり見受けられます。もう少し広い視野で書かれたものであっても、白人(欧米人)文化との比較論の域を出ていません」²⁰⁾と述べている。

このような指摘は、異文化間コミュニケーション論における日本人のコミュニケーション的特性についても当てはまる。鈴木(1995)は、インドネシア人とのコミュニケーションを通して、インドネシア

19) 同上、p.36.

20) イー・オリョン(1982)『「縮み」志向の日本人』学生社、p.13.

人が、「日本人と同様、いや日本人よりも」²¹⁾イエスとノーをはっきりと言わないこと、ストレートな表現を避け、婉曲的な表現を使うこと、喜怒哀楽をはっきり表さないこと、失敗したり怒られたりしたときにも笑みを浮かべることを明らかにしている。比較の対象を変えることによって、「日本的」なるものが相対化される。

また「集団主義」について、次のような調査結果がある。守崎(2000)は、ホフステード(Hofstede)が50の国々と3つの地域を対象に行った仕事に関する価値観についての調査を取り上げ、その調査の結果、個人主義的傾向において、日本が中程度(22位)に位置し、多くの国々が日本よりも集団主義的傾向を示したことを紹介している²²⁾。

したがって、比較の対象としての欧米偏重が是正されるためには、比較の対象を欧米以外の社会・文化にも広げなければならない。久米(2011)は、「日米比較やアメリカのコミュニケーションに関する研究が数多くなされているのと比較すると、中国や韓国またその他のアジア諸国との比較やアジア諸国の人びととの異文化コミュニケーションについての研究知見は決して十分とはいえない」²³⁾として、今後は、特にアジア地域を対象にした異文化間コミュニケーション研究を進める必要があると述べている。

このような対象の広がりによって、これまで日本独自のものと論じられてきた諸特性が、他の社会にも見られるものであるということが明らかになるかもしれないし、また、その社会との比較によって浮かび上がってくる別の日本的な特性が明らかになる可能性もある。

3.3 実証性の乏しさ

第三の問題点は、異文化間コミュニケーション論が援用してきた

21) 鈴木一代(1995)「インドネシアと日本人」『異文化接触の心理学』川島書店、p.43.

22) 守崎(2000)は、ホフステードの調査が現在でもさまざまな研究で引用される一方で、調査項目や調査対象などについての批判があることにも触れている。また、高野(2008)は、調査結果の解釈に際して、ホフステードに「欧米＝個人主義」という先入観が作用していたとして、この調査結果に妥当性はないと論じている。

23) 久米昭元(2011)「異文化コミュニケーション研究の歩みと展望—個人的体験と回想を中心に」『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房、p.60.

「日本人論」の諸概念が、実は、十分な実証をへて導き出されたものではないということである。したがって、異文化間コミュニケーション研究という学問的分野において、「日本人論」の諸概念があたかも学問的な真実であるかのように扱われている点は問題である。

「日本人論」に対しては、すでに多くの反論や批判がある。それらは、個別の記述内容の正しさを検討したり、立論上の問題点を指摘したりするものと、「日本人論」のもつイデオロギー性を指摘するものの二つに分けられるが、ここでは、イデオロギー性についての議論²⁴⁾は取り上げずに、前者の反論・批判をいくつか取り上げておきたい。

まず、ベネディクトの『菊と刀』については、川島(1950)や南(1950)が、ベネディクトの鋭い洞察力を見せている点を評価する一方で、彼女が歴史的側面を考慮に入れなかったために、日本社会の動的な変化を見落としている点、また、日本人の中にある階層や地域や職業などの差異をほとんど見逃している点などを指摘している。

次に、中根(1967)の「タテ社会」論に対しては、米山(1976)が、「タテ社会」の適用範囲について疑問を呈している。それによれば「タテ社会」は関東、または東北日本では当てはまるかもしれないが、西南日本には、座、株仲間、講、村組織、町組などの、水平的で対等な人間関係を基本とする、いわゆる「ヨコ社会」の性格をもつ集団があること、また、「タテ社会」として論じることができるのは、大企業、中央官庁、大学などの組織であり、職人、町人、講組の発達した村落などでは、やはり「ヨコ社会」といえるような人間関係が存在するという土居(1971)の「甘え」の概念については、前述の、イー(1982)による反論がある。

また、杉本・マオア(1979a, 1979b)は、個別の内容にではなく、「日本人論」の立証方法に疑問を呈している。まず、杉本・マオア(1979a)は、中根(1967)を調査し、その結果、中根が提示する命題の多くは、証拠やデータによって裏づけられることなく書き並べられている点と、証拠が示されている場合でも、それらがはっきりとした基準がないままに選ばれた事例(逸話・エピソード・個人的経験、または特殊な語句や言語表現など)である点を明らかにしている。

24) ベフ(1987)、河村(1993)、阿部(2001)などがある。

次に、杉本・マオア(1979b)では、土居(1971)を調査し、「甘え」の定義がはっきりしないことによってもたらされている議論上の混乱を指摘している。それによれば、「甘え」が、「あるときは日本人に特殊・独特な現象を描写するレッテルとして使われ、あるときは全世界の人間一般の態度や行動を比較対照するための精神医学的な分析用具として使用され」²⁵⁾ている点や、「あるときは価値中立的な叙述的道具だてとして提出され、あるときは日本社会の逸脱的・反体制的・反権威的な人びとの思考と行動を非難ないし冷笑するための用具として使われ」²⁶⁾ている点を見いだせるという。

また、高野・纓坂(1997)、および高野(2008)は、「日本人＝集団主義」、「アメリカ人＝個人主義」という「日本人論」によく見られる通説を再検討し、これまでに社会心理学の分野で行われてきた調査研究では、この通説が支持されていないことを明らかにしている。

したがって、これら実証性に疑問の残る議論が、異文化間コミュニケーション論のような学問的議論に援用されている点に問題がある。また、先の例に見たように、その際に日本独自性の観念が引き継がれている点も指摘することができる。

「日本人論」で提示された諸概念が、異文化間コミュニケーション論に引用されたのちに、異文化適応に関する議論に引用されるなど、引用が繰り返されるうちに学問的な理論や概念のように流通してしまうおそれがある点には、注意が必要である。

3.4 日本の特性の否定性

第四の問題点は、異文化間コミュニケーション論で取り上げられる日本人のコミュニケーション的特性や日本の社会・文化的特性について、否定的なイメージを伴うものが少なくないことである。

異文化間コミュニケーション研究の研究者たちは、基本的に、各文化間に優劣差を見出さない文化相対主義の立場を取っており、自文化

25) 杉本良夫・マオア、ロス(1979b)「土居健郎説への方法論的疑問—続々・くたばれジャパノロジー」『現代の眼』20-9、現代評論社、p.204.

26) 同上、p.206.

中心主義・自文化優越主義に対しては批判的である。

ところが、異文化間コミュニケーションについて論じる際に、研究者たち自身が、日本的特性に対して、否定的なイメージを持っている傾向が見られる。たとえば、次の例のように、言語的コミュニケーションに消極的な日本人の特性は、異文化接触に際して問題だと論じられている。

異民族同士が共存や対立を長年くり返してきた文化圏では、言語は相互理解に不可欠な手段である。相手を理解し、自分を理解してもらうためには積極的に話し合うことが必要で、自分の存在価値を認めてもらうための自己主張の能力は高く評価される。これと対照的に、日本人が言語に関して否定的な意識をもっていることはしばしば指摘される。(中略)そしてこの問題は、異文化との接触が急に増加している日本人にとって重大化すると考えられる²⁷⁾。

実際の異文化間コミュニケーションの現場においては、日本的特性は不利にはたらくととらえられている。こうした見解を示す論者は少なくない。その例を、いくつか挙げておきたい。ここでは、複数の論者による記述を一度に引用するので、【例1】などのように番号を付けることにする。

【例1】

日本人のコミュニケーション・スタイルの特徴は、論理的であるよりは情緒的であること、明確性よりは曖昧性が強いこと、直接的であるよりは間接的、示唆的であることなどにあることは、しばしば指摘されてきている通りである²⁸⁾。

日本人の国際化を、異質な文化を内包しながら己れの文化を豊かにし、そして人類文化を豊かにしていくことに貢献できるようになることにあるとしてとらえるならば、異文化との接触におけるわれわれのコミュニケーション・スタイルの中に、直接性、明確性、そして論理性を高めていくことが必要である²⁹⁾。

27) 石井敏(1996b) 前掲書、pp.90-91.

28) 加藤幹雄・大沼保昭・北岡伸一・杉山恭・山影進・ロックハイマー、ロイ(1987) 「国際化の促進」『事典 1990年代日本の課題』三省堂、p.432.

29) 同上、p.432.

【例2】

日本人がアメリカ人と円滑なコミュニケーションを行ううえで、特に国民性との関連でまず留意しておかねばならないキーワードとも言うべきものに「タテ社会」というのがある。(中略)その他、「甘え」、「義理人情」、「ホンネとタテマエ」といった日本人特有の感覚で外国人と接すると、思わぬ誤解を生むことにもなりかねないので、気を使わなければならない³⁰⁾。

要するに、これからわれわれはどんどん外国との交流の輪を広げて行かなければならないが、そういう時に日本流のコミュニケーションのやり方では、どうしてもちぐはぐで具合の悪い面ができてしまう³¹⁾。

【例3】

したがって、日本型コミュニケーションの問題性として克服せねばならないものは、依存性一般ではなく、「みんなで渡ればこわくない」とか、「出る杭は打たれる」、「長いものにまかれろ」といった没主体的な集団性や異質なものの集団的排除(村八分)、同質化への強要といった、「日本型順応主義」に対応するような依存性といえよう。そして、これは伝統的な〈内と外〉発想、タテ社会、甘えの構造、男性優位社会といったことで語られる日本的特徴と深く結び付いているといえよう³²⁾。

【例4】

したがって、日本人が西洋的対人関係のルールを身につけるためには甘え的な態度はむしろ有害である。甘えは、受け身的態度が基本的価値としてあるが、能動的で自己主張をする西欧人にとって、この受け身的態度は否定的態度とみなされる。日本人の異文化コミュニケーションにとって、甘えは大きな問題と言えよう³³⁾。

30) 及川正博(1990)「日本の『国際化』と異文化理解」『国際化と異文化理解』法律文化社、p.158.

31) 同上、p.161.

32) 尾関周二(1992)「国際化と〈コミュニケーション〉の思想」『国際化時代に生きる日本人』青木書店、pp.26-27.

33) 北出(1993) 前掲書、p.35.

先の「2.3 日本の特性に対する外国人の反応」で触れたように、異文化間コミュニケーション論では、日本の特性はその独自性が強調される。ここでは日本独自性の観念が強く表れていると同時に、日本独自とされる特性に対して否定的だという点を指摘しておきたい。異文化間コミュニケーション論においては、日本的諸特性は、円滑な異文化間コミュニケーションを妨げるものであり、その克服の必要性が説かれるのである。

4. おわりに

本稿では、異文化間コミュニケーション論を取り上げて、「日本人論」に見られる日本独自性の観念が、学問的性格をもつ議論においても「再生産」されている状況を、個々の事例を引用しながら指摘した。

ただし、先述のように、本稿で扱った、比較文化論的アプローチをとる異文化間コミュニケーション研究は、近年では減少傾向にある。それは、異文化間コミュニケーション研究において、比較文化論の枠に限らないさまざまなアプローチがとられるようになったことや、実際に異文化間コミュニケーションの現場に立ち、より現実的な観点でこの問題を扱うことができる人が増えてきたことが影響しているものと思われる。しかし、ある特性に対する独自性への執着というものは、簡単に消え去るものではない。私たちは、マス・メディアなどを媒介とするさまざまな言説において、古典的なステレオタイプのイメージが繰り返し語られる状況を目の当たりにしている。そうした言説は、ときに学問的性格を帯びた議論に影響を及ぼすことがある。なかでも、「異文化」についての議論は、まさに「異文化」という全体を把握しづらい対象を扱うため、そうした言説への対応には、思いのほか困難がともなうのである。また、倉地(2006a)が指摘しているように、異文化学習に関心を持つ者が、かえって学習の過程でこうしたイメージを習得してしまうおそれがある点には注意が必要である。

さて、本稿では、日本人研究者の手による異文化間コミュニケーション論を取り上げたが、今回取り扱うことができなかったものとし

て、外国人研究者によって書かれた異文化間コミュニケーション論がある。特に、日本の初期の異文化間コミュニケーション研究を支えた研究者たちは、アメリカでその学問に触れ、その成果を日本に持ち帰ってきた人々である。そして、日本における異文化間コミュニケーション研究は、アメリカでの研究成果を翻訳することから始まった。ここで注意しておきたいのは、アメリカの研究者たちも、当時の時代状況や言論、イデオロギーなどと無縁であったわけではないということである。彼らがアメリカをどのようにとらえ、他国をどのようにとらえていたか。また、欧米をどのようにとらえ、それ以外の国々をどのようにとらえていたか。彼らの異文化間コミュニケーション論からうかがえるそのような観点にも注目する必要がある。また、久米(2011)によれば、「日本人論」もまた、アメリカにおける異文化間コミュニケーション研究にも大きな影響を与えたという。したがって、その点に注目して調べてみることもできるだろう。

最後に、本稿では「日本人論」を、その方法論的問題点などを指摘して、どちらかというと批判的にとらえている傾向があるが、本稿では、これらが書かれ、受け入れられた時代の状況についての考察が十分ではない。この点は今後の課題としたい。

参考文献

- 青木保(1990)『「日本文化論」の変容－戦後日本の文化とアイデンティティー』中央公論社、pp.1-193.
- 赤坂和雄(1993)「日本人の言語コミュニケーション」『日本人のコミュニケーション』桐原書店、pp.82-104.
- 阿部潔(2001)『彷徨えるナショナリズム－オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』世界思想社、pp.1-234.
- 荒木晶子(1995)「外国人とのコミュニケーション」『異文化接触の心理学』川島書店、pp.97-107.
- イー・オリオン(1982)『「縮み」志向の日本人』学生社、pp.10-15.
- 池田理知子・クレマー、E.M.(2000)『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣、pp.1-261.
- 石井敏(1993)「コミュニケーション研究の意義と理論的背景」『コミュニケーション論入門』桐原書店、pp.3-24.

- _____(1996a)『異文化コミュニケーションの基礎概念と研究領域』『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、pp.61-80.
- _____(1996b)『言語メッセージと非言語メッセージ』『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、pp.81-100.
- _____(1996c)『対人関係と異文化コミュニケーション』『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、pp.121-140.
- _____(1997)『異文化コミュニケーション』『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣、pp.7-11.
- _____(2011)『人間と人間、人間と自然、人間と超自然の異文化コミュニケーション—新しい研究分野の開拓をめざして』『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房、pp.87-100.
- 石井敏・久米昭元・遠山淳編著(2001)『異文化コミュニケーションの理論—新しいパラダイムを求めて』有斐閣、pp.1-223.
- 岩田祐子・水田園子(1998)『異文化間コミュニケーションの教育と訓練』『異文化間コミュニケーションへの招待—異文化の理解から異文化との交流に向けて』北樹出版、pp.163-199.
- 上原麻子(1996)『異文化間コミュニケーション研究の現状と課題』『異文化間教育』10、異文化間教育学会、pp.59-74.
- 江川清(2003)『日本人の言語行動の実態』『朝倉日本語講座9 言語行動』朝倉書店、pp.29-44.
- 及川正博(1990)『日本の『国際化』と異文化理解』『国際化と異文化理解』法律文化社、pp.141-165.
- 岡部朗一(1988)『異文化を読む—日米間のコミュニケーション』南雲堂、pp.11-285.
- _____(1996)『個人と異文化コミュニケーション』『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』有斐閣、pp.101-120.
- 尾関周二(1992)『国際化と〈コミュニケーション〉の思想』『国際化時代に生きる日本人』青木書店、pp.3-36.
- 加藤秀俊(1971)『文化とコミュニケーション』思索社、pp.3-77.
- 加藤幹雄・大沼保昭・北岡伸一・杉山恭・山影進・ロックハイマー、ロイ(1987)『国際化の促進』『事典 1990年代日本の課題』三省堂、pp.421-452.
- 川島武宜(1950)『ルース・ベネディクト『菊と刀』の与えるもの—評価と批判』『民族学研究』14-4、日本民族学会、pp.263-270.
- 川端末人(1978)『異文化間コミュニケーションと自我形成の研究』『神戸大学教育学部研究集録』60、神戸大学教育学部、pp.1-10.
- _____(1997)『国際理解教育』『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣、pp.148-153.
- 河村望(1993)『日本文化論の周辺 普及版』人間の科学社、pp.143-189.
- 北出亮(1993)『日本人の対人関係とコミュニケーション』『日本人のコミュニケーション』桐原書店、pp.23-54.
- 北出亮・東山安子(1998)『非言語によるコミュニケーション』『異文化間コミュニケーションへの招待—異文化の理解から異文化との交流に向けて』北樹出版、pp.98-135.
- 久米昭元(1993)『コミュニケーション研究の主な領域』『コミュニケーション論入門』桐原書店、pp.25-53.
- _____(2006)『多文化理解のコミュニケーション理論』『講座・日本語教育学5 多文

- 化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク、pp.114-131.
- _____ (2011) 「異文化コミュニケーション研究の歩みと展望—個人的体験と回想を中心に」『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房、pp.47-69.
- 久米昭元・長谷川典子(2007) 『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション—誤解・失敗・すれ違い』有斐閣、pp.11-261.
- 倉地暁美(2006a) 「カルチャー・ステレオタイプ」『講座・日本語教育学5 多文化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク、pp.66-81.
- _____ (2006b) 「多文化共生のコミュニケーション能力とその開発」『講座・日本語教育学5 多文化間の教育と近接領域』スリーエーネットワーク、pp.149-165.
- 杉本良夫・マオア、ロス(1979a) 「中根千枝説への方法論的疑問—続・くたばれジャパノロジー」『現代の眼』20-7、現代評論社、pp.124-135.
- _____ (1979b) 「土居健郎説への方法論的疑問—続々・くたばれジャパノロジー」『現代の眼』20-9、現代評論社、pp.200-213.
- _____ (1982) 『日本人は「日本的」か—特殊論を超え多元的分析へ』東洋経済新報社、pp.1-259.
- 鈴木一代(1995) 「インドネシアと日本人」『異文化接触の心理学』川島書店、pp.39-45.
- 高野陽太郎(2008) 「『集団主義』という錯覚—日本人論の思い違いとその由来」新曜社、pp.1-185.
- 高野陽太郎・櫻坂英子(1997) 「『日本人の集団主義』と『アメリカ人の個人主義』—通説の再検討」『心理学研究』68-4、日本心理学会、pp.312-327.
- 築島謙三(1984) 『『日本人論』の中の日本人』大日本図書、pp.311-413.
- 土居健郎(1971) 『「甘え」の構造』弘文堂、pp.1-214.
- 手塚千鶴子(1993) 「『甘え』から見た日本人のコミュニケーションと異文化接触」『異文化コミュニケーション研究』6、神田外語大学異文化コミュニケーション研究所、pp.21-44.
- _____ (1995) 「異文化間対人関係」『異文化接触の心理学』川島書店、pp.133-146.
- 遠山淳(1993) 「日本文化とコミュニケーション」『日本人のコミュニケーション』桐原書店、pp.3-22.
- 徳井厚子(2000) 「言語」『異文化間コミュニケーション入門』創元社、pp.2-29.
- _____ (2002) 『多文化共生のコミュニケーション—日本語教育の現場から』アルク、pp.45-57.
- 直塚玲子(1980) 『欧米人が沈黙するとき—異文化間のコミュニケーション』大修館書店、pp.1-247.
- 中根千枝(1967) 『タテ社会の人間関係—単一社会の理論』講談社現代新書、pp.11-189.
- 中村春作(2005) 「日本文化をどうとらえるか—思想史の視点から」『講座・日本語教育学1 文化の理解と言語の教育』スリーエーネットワーク、pp.28-39.
- 鍋倉健悦(1997) 『異文化間コミュニケーション入門』丸善出版、pp.1-177.
- _____ (1998) 「異文化間コミュニケーションへの招待」『異文化間コミュニケーションへの招待』北樹出版、pp.11-40.
- 成毛信男(1998) 「言語によるコミュニケーション」『異文化間コミュニケーションへの招待』北樹出版、pp.66-97.
- 西田司(1998) 『異文化の人間関係』多賀出版、pp.1-157.
- 西原鈴子(2003) 「外国人とのコミュニケーション」『朝倉日本語講座9 言語行動』朝倉書店、pp.157-173.
- 東山安子(1993) 「日本人の非言語コミュニケーション」『日本人のコミュニケーション』

- 桐原書店、pp.105-139.
- 船曳建夫(2003) 『「日本人論」再考』 日本放送出版協会、pp.1-315.
- ブリブル, チャールズ(2000) 『21世紀に向けて 異文化コミュニケーション』 ナカニシヤ出版、pp.7-145.
- 古田暁(1996) 「プロローグ 異文化ということについて」『異文化コミュニケーション—新・国際人への条件 改訂版』 有斐閣、pp.1-13.
- ベネディクト, ルース(2005) 『菊と刀—日本文化の型』 長谷川松治訳、講談社学術文庫、pp.1-423.
- ベフ, ハルミ(1987) 『イデオロギーとしての日本文化論』 思想の科学社、pp.1-229.
- 馬淵仁(2002) 『「異文化理解」のディスコース—文化本質主義の落とし穴』 京都大学学術出版会、pp.231-283.
- 御堂岡潔(1992) 「国際意識・イメージ・価値」『地球社会時代をどう捉えるか—人間科学の課題と可能性』 ナカニシヤ出版、pp.107-122.
- 南博(1950) 「ルース・ベネディクト『菊と刀』の与えるもの—社会心理学の立場から」『民族学研究』14-4、日本民族学会、pp.271-274.
- _____(1980) 『日本人論の系譜』 講談社現代新書、pp.11-190.
- _____(1994) 『日本人論—明治から今日まで』 岩波書店、pp.1-393.
- 守崎誠一(2000) 「価値観」『異文化間コミュニケーション入門』 創元社、pp.132-181.
- 八代京子・町恵理子・小池浩子・磯貝友子(1998) 『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』 三修社、pp.11-240.
- 吉野耕作(1997) 『文化ナショナリズムの社会学—現代日本のアイデンティティの行方』 名古屋大学出版会、pp.3-18, pp.102-259.
- 米山俊直(1976) 『日本人の仲間意識』 講談社現代新書、pp.43-79.

성 명(한 글) : 기무라 아리노부

(한 자) : 木村 有伸

(영 문) : Kimura, Arinobu

논문영어제목 : Strong Belief in Japanese Uniqueness in Papers
about Intercultural Communication

소 속 : 한국외국어대학교 일본어대학 일본학부

E-mail : kimura.hufs@gmail.com

투 고 일 : 2014년 1월 10일

심사개시일 : 2014년 1월 13일

심사완료일 : 2014년 2월 4일